

多摩細胞診研究会会報

編集責任者/薄田 正 (国家公務員共済組合連合会立川病院) 発行責任者/小松 彦太郎 (国立療養所南横浜病院)

第 17 回多摩細胞診研究会御礼

東邦大学大森病院産婦人科 大村 剛

第 17 回多摩細胞診研究会開催に際し、多数のご参加をいただき有難う御座いました。

会員間の対話を重視した分、自分を抑えながら当日を聞き役として過ごしていたことの不足分を御礼方々紙面を借りて主張させていただきます。要は、要素 2 極「陰陽」結合/保存する、しないを決定する、位置 $U \cdot P/O \cdot U'$ 座標(OP-xy/xyz)関係が要力・Meson 測度/調度で存在の全てが丁度されてあることを意味します。 $1/2(0.5)+1/2(0.5) \neq 1$ とすると、[1]は何所から来たか?の問いに対する答えは、 $1=1/2 \cdot L^2=1/\pi' \cdot 1/\pi \cdot i^2$ 由来である、と答える。

【細胞診における染色と固定論】

無着色の繊維性の衣料をまとっていたときに、偶然ついた‘シミ’の鮮やかさを衣類に着けて色を楽しんだ時代から、何故色が付くのかとか、混色による彩度や明度変化と光化学的追求は光合成と生命存在の等価性にその探究心が及び、その興味はひいては Atom と元素の関係に行き着いたと考える事が出来る。存在元素に包含される陽中心体を周る陰要素間結合は、磁石 (N,S) 2 極対構成数の周期律 SN 構成との間の引力および斥力関係をベースに置いた N[陽—陰⇄陰—陽]S の斥中心の中心引力時間= {陽[陰/N→←S/陰]陽} 関係へのスピン変換が NS 結合 →M 回帰へ結論される。 $c^2 \times m'm$ の光作用因果で磁電—電磁位置互換能変化が励起され、斥力は引力関係へ変わることを利用して、光化学結合と生命素 (H₂O,CO₂,NO_x)存在が在ると考える。

球:S 時間概念を 2 つに割ると、自分 s の居る座標分の時間と、s² 自分時間との、対 2 分の時間(2s^{4t})が自分とは別に流れてある。

L 空間の大きい差[scalar l³]V 体と、時間の長い差[scalar t³]M

体間—積分 MV 量の統一量=MV(L/NS · P+ · E)Rot.積/∫∫₀₀₁ ·

$d^2s/ds^2=F(M)$ 由来。 M=Magnetism 1 とすると、

G-Action/M · Digid.=質点圧縮率 M 密度 σ で、その Rate

比= $c^8/c^2=1 \cdot \sigma /T^2(cs)/2=e^{i\pi\pi} / \pi R/\mathbb{H}=\mathbb{D}(s/s^2)=self$ である。

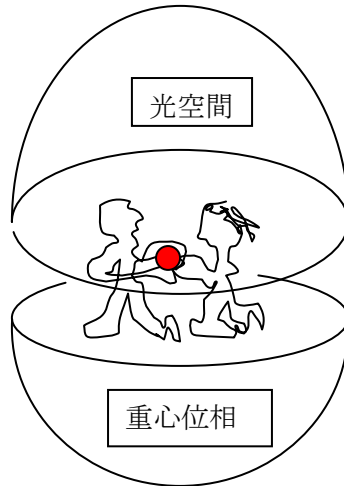
∴ $csi^{s/s}/MV(2)=SU(2NS)R'R/SU(3)=M[SU(1)]$.

∴ $s/c=1m, s/c/m=1$ の 1 が, System Unity=

$M(1)[N(1)+(S(1))]=M(1)+NS(2)=0'0/|1|$ となる

σ (集合) 自由度/G $\Sigma \cdot \text{Freedom}(N, S, P+, e-) = F(s/s^2)/M$. が、Function Meson.
 $\text{MesonEF} = Ux[[\text{Unit}[cs/s^2 = c \cdot d / \in \ni / e^2/2/G^2] \leftrightarrow [\text{UJE}[:] \leftrightarrow [\text{FE}(N, S, P+, e-)]]]$

$S(\odot)/2 =$
 「心」 $\div 2$
 $= e^{i\pi + \pi}$
 $\therefore c^2 \times e^{2\pi}$
 $= M$ 回帰。
 $M/2 = \text{Cosmos}$
 +人存在。



$E^2/2 = FP^2$ [位置エネルギー $U^2 +$ 運動エネルギー M^2]。このモデルを「人」として扱い、全存在の Origin = $[1/2 + 1/2 = 1 \leftarrow 0^2/2]$ Origin を考えると、 $0^2/2 = \text{Origin} \cdot \text{Origin} = -r+r$ $[-0 \leftarrow e^{i\pi} \rightarrow 0+] \cdot \Pi_{1/2}^2 =$ Sein/Existency = self.

色素概念より先きに出来上がっていた生体を構築した分子は、いうなれば「生命を分けた粒子」とか「命構築分の分子」のことを意味する。Function Live/ $F(x) = 1(L)/\text{Pranks Length}$ のことを数 1 と L との等価性と言うから、Function Death= $F(y) = -1$ のこととすれば、 xy 積 $\div 2 =$ 生死間距離 L=位置 $E(L)/U$ 観が生まれてくる。L の位置は波動/生命粒子 = $1/L$ (核膜/次元) 等価の量 $\cdot t/t'$ 時間変換/self に等価の関係が生まれて来る、球 (s) \times 心 (c) 平面の $c^2s^2/2 = L/s^2 = 1$ が成立する次元表面 = 位置エネルギーの記号 U に等価関係に在るから、生命構築分の粒子 = 機能子 $F(x) = F^2$ 強度が生まれて来る位置の事を次元変換エネルギーの位置と言う。質点が大きくなる L 平面を地球質の点表面 $L = 4\pi r^2$ /球面ベクターと思えばよく、密度 $4/3 \pi r^3$ ベクター由来がニュートンの云う $[F = m \alpha \text{ 秩序}] =$ 個体誕生に等しくなる。[球体存在] E^2 強度 $\div 2$ 由来 = 生命素分子と、元秩序 E^2 強度 $\div 2$ 由来 = 色素分子との結合が、 m' を生命分子、 m を色素分子とすれば元が同じ出自 $:mc^2(A'A = m'm)$ 同士の共有結合 $m'[:]m$ の形を顕微鏡下に観測するとき感ずる結合機序は、原子[元素変換低分子出来観]と色素—生体分子間結合のメカニズムは同じ事になる。

観察 : N/C ratio や G/S ratio が大きく見えたり小さく見えたりする事の意味は、細胞機能間の同志的結合を成果出来る表面マーカー/Function($P+, e-$)に抛る細胞の形作りとその配列の仕方が、固定後に染

めたときに見えた細胞の自主的かつ自立、自律運動因果時間の量的コースの差—分経過が前癌、癌過程で健常細胞とは異なる N/C や G/S コースを辿って来たから、異なる形や配列をして来たのだろう、事を思えるだけの固定と染色のスキルを問題のテーマに設定したのであります。

色の素は岩塩や草木染めからヒントされた「色素」と生体構築分子との間の時間の共有共存結合 $m'[:]m$ の形は、色覚機能素が生命機能・単位分子に染着したとでも表現するとよく、染着機構と固定機構の事を思うとは、ただ色素と固定分子 (H_2O と C_2H_5OH または $HCHO$) との間の互換関係が分子間関係の位置 $U[:]$ に保存されてあるから、生命分子と色素分子との結合互換性関係の観察が、結局は生命分子の持つ陰陽電荷間の結合、反結合性と呼ばれる力と反力関係、作用と反作用関係を見て、その究極に量子 $E[:] = mc^2$ が機能して命の形が在ることを思う過程が[(イマジン[:]存在)] = 細胞観察の内容であるとすればよく、細胞診とか組織診とは「心眼と脳イメージ」とで分子間の結合/[:]在り、と反結合/無し[:]の時間因果を見て[存在因果/時間の流れ・方]を感じ取る事に等しい、と、思えばいい。

今自分が見ている対象 (客体) 自身が存在する場時間 $f(t_1 \cdot m_1/r_1)$ 積の流れと、主体が存在する場時間 $f(t_2 \cdot m_2/r_2)$ 積の流れに共通の時間 t は、分母の両マトリックス時間場 f^2 空間内部に居る固有時間 m_1/r_1 と m_2/r_2 間関係を調度するエネルギーを $[c^2]$ 強度とする力もちである。主客体関係に共通の分母時

間は、 $1/2 \cdot d^2c^2/dt^2 = s/x + s/y = 1/T^2$ 由来を時間の過去の関数 $h(\lambda \nu / A^2)$ から測度エネルギーを調達し $M(m' : m)$ 回帰を図る。座標 Matrix function(x) = x^2 座標別時間 + 客体別時間 x + 主体別時間 y 関係は L (分母) がエネルギーを R (分子) へ届ける存在/存在強度の関係にある。色素と生体の両分子間関係は、分子 [(時間 y 座標) / (時間 x 座標)] / [分母 $z^2/2$] は、分子・分母積別存在時間関係/2 (Meson 機能) = 色素存在時間 + 生命存在時間・関係を観測する事である。座標時間 $t^2 \div 2f(MD)$ 遷移 = 位置(x,y)の形式を踏む、等号を介した時間の過去から今への時 $t^2/2 \equiv [F(G \cdot m_1 m_2 / r_1 r_2)]$ の流れの上に在る分子 $F(m \alpha)$ 関係/座標 $x y$ と座標上の自律運動粒子 $A'A$ (原子元素) 成長分子関係になる。分子 A,B 間-関係 (システム) 因果の個々の時間の流れにとっては、マトリックス時間の流れは、分母 $t^2/2$ 由来 system = x,y 座標分 + 粒子 $F(m \alpha)^2$ 積関係となる。

分子 A,B 間関係: 電荷間引斥力統一量の引力または斥力行使自由度 = [:] 配分協調度・個々の m_1, m_2 のスピン自由度が、座標の上で動く Freedom(N,S,P+,e) 権利行使者同士の自由衝突関係に任せられた責任要素間の co-ordinative movement = $P(h/\lambda) / [co' \cdot J \cdot oc]$ 変換 $[m' : m]$ / 共有結合形成へ到着するから、この時間経緯は分子 vector 間 $[m'A'A]$ 反応は固定要素または色素分子と生体反作用素分子との間の作用-反作用関係時間の流れ方と等しくなる。簡単に言えば化学反応のことである。分子反応自由度を許す座標空間をマトリックスとした分子位置 r_1, r_2 の順番数 1 から n 間の間の時間的な関係は衝突と分子創造、分子衝突と細胞創造時間のことを分子進化と細胞進化と云う。当然の因果の流れである多細胞衝突関係は、光合成する植物と、光合成の出来ない動くものとしてのヒト生命の誕生へ時間は進化する。過去位相 E と今位相 E 間との結合と反結合が Energy Freedom Existency 自由 (N,S,P+,e) c^2/m 由来 = 存在度の交換 = 自然と生命との存在 [方 1 体] 方式は、matter : $m' [:] m \cdot EF/s^3 \cdot 1 \leftarrow 1/2 \cdot s^8/2$ 由来関係を染めて観測している事になると思ってい事でありましょう。すると、 m' と m の間に在る記号 [:] = 2 電子間結合は、時間の過去と今とが衝突冷却 → 化学結合量存在の全体の流れを、宇宙重心と人重心とが見えない糸で結ばれて在る存在

と違って居る事になる。

ドイツ語で云う「Anfang = beginning とは、始める事」ですから、始原 A「(Anfang/Atom) : 原子系 (時間システム)」を、元素 A : Agent 系 (時間システム) に対する A の導関数 A' の位置に在るとすれば、始原 A は自分で $A^2/2$ して形を $A' \cdot A$ へ変換する過程は、絶対零度の虚勾配/次元/元の時間の壁を自分のエネルギーでひっくり返し、負時間場からもう一回正時間場に至る $pt(h/\lambda)$ 操作時間の後の時間は、普通の温度領域に居る自分の形作りの経過を観測する位置に居る自分の事を見ていることになるから、絶対零度とセ氏零度との間に在る温度差存在を 0'0 時間とすれば、Tunnel(o'o) = $A \cdot mol.$ の Avogadro 数倍 = $m' [:] m = n \cdot mol.$ の生命素分子がいわゆる低分子 H_2O, CO_2, HCN, NO_x 時間積群分が生命分子時となる。ゆえに $n A'A = a \text{ cell} \cdot m$ の形が在るのも、 $N/C \cdot ratio$ の比の力で $n A'A mol \cdot m$ 数-量/nm の数の交換・可換関係 = 1 由来が、 $EF = s/s^2$ / 自己システムそのものは、「重心位置 $U \cdot BIGBANG$ 」後再集合し続ける時間の長差 = 瞬間毎に自分の生命が地上位相に在り、在り続ける事 (matter) が出来る次第であると、考える事が出来る。

見えない物/者の事、もの [matter] の怪 = 気/存在 / 1'1 関係が運ぶ力の量 = 量子 $t[A'A] \cdot Meson$ 変換時間が、見える時間要因 / (中性中間子) = 0'0 概念時間を越えて見えて来る事を固定染色過程と思えば、定数 C 対定数 N との積 CN 時間 $\div 2$ の分 = 自分存在・等価因果時間の結果が、Field $C(s/c \cdot 1m) / Cytoplasm$ 対 $Nucleus = Function Cell Existency time$ と等価と考えると、 $N/C \cdot ratio$ は子宮内膜における Gland/Stroma $\cdot ratio$ に依存した自分分の動きは、受精卵が自律増殖エネルギー : 1 なる勢い = $F(m \alpha)$ の形の存在経過は、自分分の座標 x,y も座標 Uterus (古語 Matrix) 内部で出来上がったのだから、子宮の中に居た自分の事が記憶に無くても自分存在がある事を、0'0 量の量子力学因果時間の極みの量であるとすれば理解が早い。

Un-observable volume 変換 → Observable volume 出来 (しゅったい) / 次元 (冪メソン) パワー (不可視対象 $\times c^{1/2}$ & $\times c^2$ の $m'm/A'A$ 変換経過 = 可視 mv 量存在) が、記憶の無い自分の形の形作りの過程 = 自存因果経過に等しいと考えればいい。

$F=m\alpha$ の過程は、 $0'0/1'=1=存在\ s/c \cdot 1\ m=$ self
 で自分存在が在った事と等価とすれば、ニュートン
 のもう1つの運動方程式： $F(G \cdot m_1m_2/r_1/r_2)$ にお
 ける $m_1\ m_2$ 積関係が Kepler 空間 R^3 重心の過去の
 過去時間位相時 T^2 位相における時間積操作 $m'm$ の
 事に等価であるとするれば、 r_1r_2 積量は過去 r_1 (range
 1 番目)と今 r_2 (range 2 番目)との間の附番号が付け
 られない順序-空白時をつなげる因果時間の流れ方
 が、虚時間位相 $\cdot it=T^2$ 位相時であり、虚時間は中性
 中間子機能[:]点変換機能で it 同士の衝突熱変換→
 $cal./Jour/V-version/c^2$ 因果←由来 (磁場と電場がク
 ルクル変換) $\cdot \pi'\pi$ 振動回転/位置 Meson 仕事分の
 エナジー経過時間に等価であり、この時間経緯が色
 素 m と生命分子 m' との間に成立する共有結合時間
 $[0'0/Meson]/1Time=$ 自己変換関係 $\cdot s/s^2$ に等価であ
 る。 $T \rightarrow t$ (重心体 m_1, m_2 の日常時間)変換位置で測度
 した因果時間の流れが人存在に等しくなる、と考
 える。それが自分の量 mv 積を運んで来た $p/p'=$
 Q (quality quantity)比 $path/p^2$ か? と疑問すれば、
 自分の獅子身中の虫・慣性「 c 」の肩の強度の上の
 点(!)=導関数が騒ぐと、自分が元気になる時の経過
 をよく考えてみると、重心が熱くならないと動き
 が取れない心身存在の仕組みと同じと思えばいい事
 である。虚の場に在っては、虚を取り込み $\pi'\pi$ 変換
 を経て力を発揮する姿形は「ヨッコラッショッ」と
 自分で自分に鞭打って動き出す動き方のことをモメ
 ントと言ったりすることを思えば、Meson の
 $[jo-kkorasyo !]$ $Moment=EF$ 積/ $m'n'$ 変換 $\cdot E^2/2 \rightarrow$
 $m^2/2$ 互換可の過去—今時間交換関係エナジーと、 m
 内部で起きる離心率 $[-1(e^{\pi})/c^{1/2} \leftarrow e^2/2 \rightarrow c^2(e^{\pi})]$ エナ
 ジーの斥力エナジー発揮の仕組みと、元 $[e]$ 回帰=
 mc^2 システムは方向だけが時間に関して逆なだけだ
 と置いていい力の仕組みである。

色素ないし固定のために使う分子と、生命分子と
 の間に結合関係が発生する事と、細胞間結合総体を
 臓器と呼べば、臓器間結合が血管と血流群の支配と、
 神経および神経内分泌システム群との2重支配方略
 でダブルコントロールされる人存在の格の重さと、
 宇宙全体の格の重さの比を中間子が支配する。

$Rate(\alpha /G) \leftarrow [1/2 \cdot e^2 \equiv Meson\ controls] \rightarrow$
 $[c^8/c^1]/c^2/E/M/\pi\pi'$ =レベル $[m^2 \cdot m]/e$ の振動回転メ
 カニズム/エナジー方式=Existency とすれば、その

形式は次元 M 操作分のことに等しく、積 $E^2=2$ 分
 対応 $\equiv E^2/2=m(hv)c^2$ 強度 $\equiv [ic^2]$ 度で2分された球体
 $1/2s$ 分 $\cdot (1/2\ sphere) \equiv$ 半球分の重さを生命存在と
 云い、残りの $1/2s$ 分の重さを宇宙と云う事とに等し
 い事になる。ダブル表現で云う、丸い円の形をした
 原点内容が全スピン強度 \equiv 全球回転強度に等しいと
 すれば、ダブル表現：円球 360 度回転分+直径 R
 振動量同時/球体 $1s$ 自転分 $\div 2$ がスピン $1/2\ s$ に等価
 として扱っている事が、 $f(x \cdot \times 1/2s)=y$ が、sphere
 時間 $(x+y)=human \cdot 1/2(x)+cosmos(y)=Existency\ E$
 とに等価関係にある事と操作して、自分存在と
 宇宙存在とを同じ matter (事) /時間出来(しゅった
 い)時と同じ時に生れたとしているとすれば、[半球
 2つ分で1つ球スピンに等価]の関係は、事の大小差
 が在っても感覚的には「1 : 1」対応とみなす。

原子元素 $A'A/e$ 離心率由来論理を「底」にした
 $Logos_e\ x=y$ とその逆の $x^2/e=y$ で記号され記載され
 る記号 $F(y)=$ 時間過去分 $c' \times$ 時間今分 $c/$ 対応
 $[1:] / m' [:] m=$ 存在 $x \leftarrow$ 無理数 $[e]$ 由来は、 $x/y/e=1$ に
 対応し $xy/e=1, x/e : y/e=1$ が両立する関係は、 $[e^2 \equiv$
 雌雄陰陽] $/2$ 割=存在回帰分の等価 L 項、 R 項エナ
 ジー $[1:1]$ 対応の意味に等しいことになる。

Co-ordinative Junction 機能 [:]=人存在+宇宙
 存在同時の事を真の意味の virtual Reality と云え
 ば、宇宙重心の在る位置と人の重心の在る位置との
 間は見えない縁：「赤い臍の緒」で結ばれているから
 こそ自分が在ることを意味していて、 $[c,s]$ 2 対性と
 $[P+,e-]$ 対性と $[N,S]$ 2 重性の対 4 重の重なるの存在
 論理 $[c^8]$ 性が属性と呼ばれる更に高位の論理対を構
 成していて、元論理は2つに割る2分概念が元1つ
 から分かれた実存 RE と虚存 $i \cdot E$ が2重 (iRE^2) にな
 って自分の中に「存在する」。この虚実、重なるの重
 なるの言い習わしが、オイラーの「無理数 e 」に機
 能「ダブル e 」する力とルートする力と中庸を行く
 力の3つの矛盾した力を与えてある。だから自分の
 身を2つに割って出来た陰陽積由来は、時間今+自
 分存在が \leftarrow 虚存在 \times 正存在/自分存在のルーツ $\div 2$
 $path+1$ 由来関係にある事が、自己内部と関係する
 時でも外部存在と関係する時のいずれの時でも、そ
 の関係が相互に秩序の素を与え合う時間の過去と未
 来との関係が一本になって未来へ行くエナジー/位
 置関係/自分に等しく、自分が重心 st 積の位置に居

て自分を未来へ押し上げる熱度に等しいと置けば、 $[c^2]/m$ 積分過程は今自分が存在している事に等価である。

量子トンネル=delivery path 通過分のエネルギー=自分存在「mv vector 積」←由来 scalar/s²=自分存在に等価の事と思えばいい事で、化学的共有結合の事を記号形式で表現し、 $[C^O-J-OC] = m'[:]m/mv=$ self へ意味させればよく、Unit[重さ-J-重さ]=質量mとすれば、Unit[機能-J-機能]=self・M (mv) 由来であろう、と思います。自分の重さMと体積Vの積分量MVを時間で偏微分する (d^2MV/dt^2) = $\iint \text{Я R} \cdot \text{Path causality} = \text{Ex}(\text{Self})$ と考える。母の卵巣内卵子と父の精巣内精子が、自分微分=S(1/2 s + 1/2s)時代は覚えていなくても、自己前身 1/2s 同士の衝突と Matrix 内部時間は覚えてなくとも、自分は

確実に存在していたのだから、System Unity Existency=SU(1,2,3)は、母の巣と父の巣から飛び立った $S''(\sigma) \rightarrow S'(0) = \text{SU}(1)/\text{self}$ は、自分を微分すると、出てくる答えが、SU(3)/[父、母、子]であれば、SU(2)=父母/c², SU(1)=子である。

宇宙存在にも父、母、子の Triad 構造が在ると考えると、数学を含めたすべての学問がやさしくなる。父と母と子との3つの要素から存在が成立してあることは、幼時の段階ですでにその子の心にハード化されてあることで、存在の統一 Mechanism / SystemUnity の事を難しく考えることは無い、と思う。

結語：

最後に記号で締めることにします。

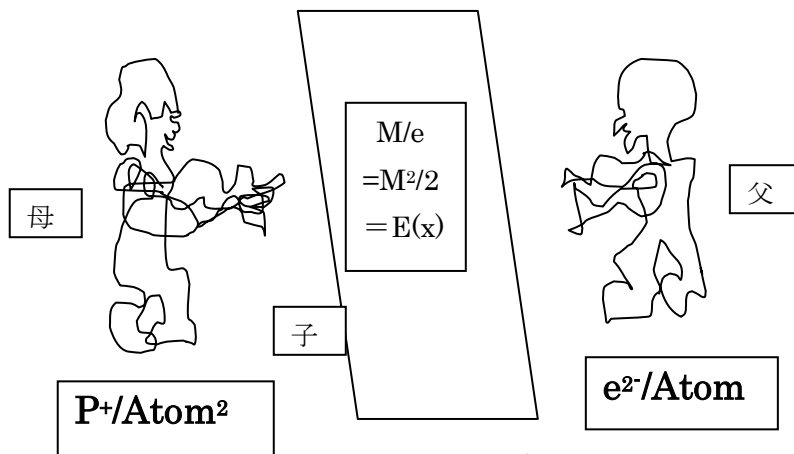
$$1/2 \cdot \mathcal{E}[e^{i\pi\pi}] \cdot \text{Я R}_{\text{Existency}} [m' : m] = mv.$$

∴ mv 積/s²=s(自分分の体重量)=今見ている標本の形色存在量である。固定および染色過程は、分子 m/2 回帰時間 = $m'[:]m \text{ path Energy} = \text{可視化 } E=mc^2$ と等価となる。

$$\text{Atom} = \frac{[N(P^+)1/e^\pi \leftarrow \text{Meson}/e \rightarrow 1/e^{i\pi}(e^-)S] \phi}{M[N^2(N')]\phi'}$$

Unity (1へ統べる) 人の字隠喩 (λ_H^h) = $\nu \Pi = \text{人}$ 。

$$e^+ \Leftrightarrow \text{鏡} = M \Leftrightarrow e^-$$



の道を、相変わらず酸化だ、還元だと一括しながら、酸塩基平衡(平行・並行)のシステムサイクル[一/二/三/四]//[0'0]仲通りの次元平面を行くわけで、一筋縄では行かぬ裏表虚実四筋 path power を己れとすれば、常在冪数力・反'(半)⁸乗分/元数の E'E 中性中間子裏腹路(ピタゴラス+ユークリッド)軌道を行く自分は、

【追記】

来年、平成15年3月末日を以って停年退職となります。医療に籍を置かなければ生きて行けませんので、産婦人科のタイトルを維持しながら、生命科学

元・次元トータルの経路を行くには、経路分と自分存在分のパワーは両方で $F=mc^8$ くらいの力が要るかと思っております。

したがって、いつでもそうですが、ニュートンがいみじくも指摘した力: F_2 量の2者択一経路は、一路は地獄の熱時圧縮積 $T^2/^\circ C/1s$ を2分する仕事量 $= dT^2/ds^2 = \iint 2^\circ C$ 分の聖杯希求の時間の旅であるし、もう一路は $Path(U^2/2)=1$ 人/空間 R^3 /時間 $T^2 \rightarrow \uparrow \times \downarrow \leftarrow$ の迷路複素性と回帰迷宮を重ね往く“たび”は、都合、表裏 $1/3$ 元本掛ける $3=1$ 本通りを行かねければならず、自分の分身を左右に置いて、 $S(s/c \cdot m)$ の三位一体 ($sT+sint+cost$) 量が同じ道を循環回帰する自分に等しい事を見つける、過去未来/左右等価の獅子身中の虫/e を頼りに、 $2 \times z^4$ 回帰 $= mc^2$ 時間の旅は、どう転んでも2本線になるかと思えます。
Cell-Path / 2 のいずれを辿るにしても Live & OR Death / 細胞からは離れられず、ミクロの世界に行くことになることは間違いないし、多摩細胞診研究会が小生の人生の第2のスタート台になると思っています。

平成14年「亥」月 大村 剛

第16回多摩細胞診研究会プログラム

開催日：平成14年3月16日（土）

開催地：杏林大学医学部実習室・臨床講堂

---教育講演---

『唾液腺（耳下腺）の細胞診』

癌研究会附属病院 都竹 正文

---スライドカンファレンス---

症例1

BML・PCL ジャパン 長谷部 鏡子

【症例】甲状腺穿刺材料、66歳 女性

【臨床所見】2年前に右乳癌にて手術。超音波検査にて左甲状腺に 1×1.5 cm 大の石灰化の伴う腫瘍を認めた。

【細胞所見】きれいな背景に濾胞上皮の集塊が認められ、濾胞上皮細胞は軽度の重積性を示す、小腺管あるいは小乳頭状様の集塊で認められる。

個々の細胞はライトグリーン好性の淡い細胞質を有する、核は微細で密なクロマチンパターンを示し、

核形不整、核縁の切れ込みが多く見られる。以上の核所見と小乳頭状様の集塊形成などの所見により乳頭癌と診断した。その細胞診結果により腫瘍摘出術が施行された。

【病理所見】材料は $35 \times 30 \times 28$ mm の白色調を示す腫瘍で、摘出標本は被膜に覆われた病変で濾胞上皮は小濾胞～部分的に索状増殖を示す充実性の腫瘍。被膜浸潤、脈管浸襲像はなく、病理組織学的には索状構造を伴う濾胞腺腫と診断された。その索状構造を示す部位での腫瘍細胞は核形の不整が目立ち、一部核内細胞質封入体様の核内空胞が見られるなど細胞異型を伴っていた。

【検討】病理組織診断の組織像を踏まえ細胞像を retrospective に検討した。

1. 出現濾胞上皮細胞は小集塊が多く、一部小腺管様構造で出現。
2. 濾胞上皮細胞は立方状の上皮で構成される。
3. 核溝の形成が目立つ。一部核内空胞が見られるが、輪郭明瞭な明らかな核内細胞質封入体とは異なる。
4. 細胞質は淡明である。

以上が本症例の出現細胞の特徴である。この特徴を基に本症例と鑑別を要する病変、とくに当初診断した乳頭癌症例を中心に、さらに濾胞性腫瘍（癌）、硝子化索状腺腫について鑑別検討を行った。

1. 乳頭癌

核所見は乳頭癌、本症例ともに核縁の切れ込みが見られ、細かいクロマチンパターンを示す点は類似しているが、乳頭癌でみられる核内細胞質封入体は輪郭明瞭であるのに対し、本症例は輪郭不明瞭な核内空胞であった。細胞質において乳頭癌例は厚みのある、細胞辺縁の明瞭な細胞質を示すことが多いが、本症例の細胞質は泡沫状淡明であるなどが相違点と考えられる。更に細胞集塊について、本症例は明らかな乳頭状病変をイメージできる集塊と判断するには乏しく、乳頭状と解釈した集塊は索状構造の一部であった可能性も推定できる。

2. 濾胞性腫瘍（癌）

濾胞性腫瘍（癌）、本症例ともに細胞質がレース状の淡明である点は類似所見と考える。核所見においては濾胞性腫瘍（癌）例の核は核形不整の少ない円から類円形核で、粗な濃染するクロマチンパターンを示す核所見に対し、本症例は核縁の切れこみ、核

形不整が目立った。クロマチンパターンも細かく、明るい核所見を示す点が濾胞性腫瘍（癌）とは異なる。

3. 硝子化索状腺腫

本症例と硝子化索状腺腫は、レース状の淡明な細胞質に明るいクロマチンパターン、核縁の切れこみを示すなど、類似した細胞所見を示す。相違点は間質成分の硝子化の有無が重要となる。硝子化索状腺腫の硝子物質はパパニコロウ染色ではライトグリーン好性の透明感のある無構造物質として認められる。又、ギムザ染色においては、メタクロマジーを示す無構造の成分として認められる。硝子化索状腺腫と本症例の相違点は、細胞所見においては鑑別が困難であるが、間質成分の硝子化の有無が重要な鑑別点となる。

【まとめ】本症例は現在、濾胞腺腫に分類されているが通常の濾胞性腫瘍と細胞質は類似している。しかし、核所見は異なり、むしろ乳頭癌の核所見と類似しているなど組織型推定（濾胞性腫瘍、乳頭癌）にあたってアンバランスな細胞所見であった。病理組織像においても索状構造を示す部分は優位に核異型が認められ、その細胞が細胞診標本に反映されたものと推測される。硝子化索状腺腫との鑑別では、濾胞上皮細胞同士の所見は類似しており、硝子化の有無が重要な鑑別ポイントであろう。本症例は核所見を重要視し乳頭癌と診断したが、細胞質の所見、集塊構造等を総合的に判断すれば乳頭癌と診断するには矛盾点があった。細胞集塊構造の検討においては組織標本に見られた索状構造を細胞診標本で特異的にイメージすることは困難であった。症例を重ね、細胞診標本でいかに索状構造をイメージ出来るかが今後の検討課題と考える。

症例 2 耳下腺 Acinic cell carcinoma の一例

武蔵野赤十字病院 病理部 宅見智晴

【症例】 35 歳 男性

【検査材料】 右耳下腺穿刺吸引細胞診

【主訴】 右耳下腺腫脹

【臨床診断】 右耳下腺腫瘍

【細胞所見】 出血性背景に毛細血管を伴った腺房様細胞が乳頭状集塊で散見された。核形は円形～楕円形で、核クロマチンは細顆粒状、核の大小不同が軽

度みられ、小型な核小体も認められた。胞体はライトグリーン淡染し泡沫状で広く、好塩基性の顆粒や空胞も認められた。以上の細胞像から Acinic cell carcinoma が疑われた。

【病理所見】 腫瘍は出血性で 3.5x2.0x3.0cm 大。組織学的に腫瘍細胞は、充実性、乳頭状増生、小腺腔形成をみるが基本的に腺房様の構造を呈していた。核の大小不同、明瞭な核小体が認められた。胞体はやや好塩基性で空胞を有するものもある。以上より acinic cell carcinoma と診断された。

【まとめ】 腺房細胞癌は正常に類似した細胞形態を示す。本症例では、採取細胞量が多い、結合性が乏しい、毛細血管が豊富、細胞質の空包化が目立つなど腺房細胞癌を示唆する所見が観察できた。

【解答】 Acinic cell carcinoma

症例 3 肺 Combined large cell

neuroendocrine carcinoma の 1 例

佼成病院 病理科 舍利弗 都々子

【症例】 67 才、男性。

【臨床所見】 胸部単純 X-P で、右下肺野に異常陰影を指摘され、気管支擦過検査を行った。

【検査材料】 細胞診検査として、気管支擦過標本とブラシ洗浄液が提出された。

【細胞所見】 気管支鏡標本では、核の大小不同、N/C 比の増大を示す細胞集団が認められ、一見まとまっているが、外側に向かって線状に伸びている部分が観察され、細胞境界も不明瞭であった。ブラシ洗浄液では重なりが少ない細胞集団で結合性は緩やかであり、腺腔様配列、索状配列が見られた。又、N/C 比が高く、ライト緑好染を示し厚みのある細胞質の大型細胞も認められた。以上の所見から腺癌と神経内分泌腫瘍を疑ったが、結論としては腺癌と報告した。

【病理所見】 摘出された肺腫瘍は右下葉肺門側に位置する 30mm 大で、膨張性もしくは圧排性増殖を主体としていた。組織学的には明瞭な管状構造を示す部分と低分化な充実性部部とが混在していた。充実性部分に関しては、神経内分泌腫瘍としての光顕的所見、核分裂像が強拡大で 10 視野 11 ヶ以上であること。ChromograninA、Synapthophysin は陰性であったが、NCAM は陽性であったことから、Large

cell neuroendocrine carcinoma のほかに腺癌部分があるので、全体としては、Combined large cell neuroendocrine carcinoma であった。

【解答】肺 Combined large cell neuroendocrine carcinoma

症例 4 顎下腺腫瘍の一例

公立昭和病院 病理科 近藤 洋一

【症例】62才女性

【検体】右顎下腺エコーガイド下穿刺吸引細胞診

【臨床診断】右顎下腺腫瘍、Pleomorphic adenoma?

Malignant change?

【細胞所見】細胞量は比較的豊富で重積著明。核は小型類円型で緊満感があり、N/C比は高くクロマチンは増量している。一部典型的ではないが Adenoid cystic pattern 様所見や管状配列を示すクラスターを認める。Adenoid cystic carcinoma も推測されるが、明らかな粘液球はみられない。背景は粘液様物質で小クラスターと小型類円型で緊満感のある裸核様細胞が散見され、一見、上皮・非上皮成分を思わせる出現形態であり、Pleomorphic adenoma も否定できない細胞所見である。

【組織所見】腫瘍は間質粘液を貯めた逆転した cribriform pattern の認められる腺様嚢胞癌であり、硝子化した間質を伴い索状に増生する部分や充実性胞巣を形成する部分も認められた。

【解答】組織所見から充実性胞巣部より採取された Adenoid cystic carcinoma と考えられ、充実性胞巣部より採取された検体では典型的な粘液球の所見に乏しく注意が必要であった。細胞診では、一見、多形腺腫に類似した細胞像があるが、細胞量・著名な重積・クロマチン増量・緊満感のある N/C比の高い類円型核などが鑑別のポイントになると考えられた。鑑別診断としては、多形腺腫・基底細胞腺腫・基底細胞腺癌などが挙げられる。

症例 5

杏林大学医学部病理学教室 住石 歩

【症例】69才、男性。

【臨床診断】左耳下腺腫瘍疑い

【現病歴】2年前より左耳下部に腫瘤出現。今回、左眼瞼麻痺にて当院受診。

【材料】左耳下腺穿刺吸引

【細胞所見】組織球、好中球を多数伴う炎症性背景の中、腺腔構造の見られる小型の細胞集塊を少数認める。クロマチンの不均等分布、いびつな大型好酸性の核小体など悪性所見は豊富だが、組織型は何を考え、細胞診断として、どこまでふみこめるのか。

【解答】Salivary duct carcinoma 組織は WHO (1991)、AFIP (1997) にて NOS とは別に分類されている。細胞診では取り扱い規約では分類されていないが、どこまで近づいていけるのか、こらからの課題であろう。

第 17 回多摩細胞診研究会プログラム

開催日：平成 14 年 9 月 28 日 (土)

開催地：東邦大学大森病院 5 号館 B1 階 臨床講堂

---教育講演---

『細胞診における染色及び固定の基礎化学』

武藤化学株式会社 渡部 明朗

---スライドカンファレンス---

症例 1 婦人科病変

BML 病理・細胞診センター 新井 康弘

【採取部位】子宮頸部 (初回時検体)

【年齢】45 歳 性周期 14 日目

【主訴】帯下 不正出血

【経過】初回時：2000/11/01 2 回目：2000/12/18 3 回目：2001/04/09 に細胞診を実施。細胞診自動スクリーニング装置 Auto pap にて測定後、細胞検査士が鏡検を行った。

当施設における初回時細胞診は、細胞診自動スクリーニング装置 Auto pap で No Review 再検不要、細胞検査士の鏡検結果は、頸管腺細胞の核密度の高い大型細胞集塊を認めたが、個々の異型が弱かったため頸管腺細胞の核腫大で class II の陰性とした。その後、2 回目：2000/12/08 class II 3 回目：2001/04/09 に再度検体が提出され、臨床所見：頸管ポリープ 壊死所見 (+) の情報に基づいて鏡検を行い、頸管腺細胞に核の多層化、極性の乱れ、核形不整やクロマチン増量が認められ class III Glandular atypical cell と診断した。【組織所見】正常頸管腺に類似したきわめて高分化な腺様構造がみられ、腺管構造は正常の頸管腺に比べ不規則な形

状と大きさを示し、腺腔は比較的小さいものから、大きく拡張した腺腔のなかには粘液を充満したものが認められた。細胞は高円柱状、胞体には豊富な粘液を有し、核においては多層性が認められた。**Adenoma malignum** と診断された。

【Retrospective な細胞所見】重積を示す頸管腺細胞由来の細胞集塊を認め、細胞は高円柱状で、核の多層性、核の極性の乱れや円から類円形の張のある核、核形不整、クロマチン増量が認められ、胞体にはポイントとなる豊富な黄色調の粘液を有しており、組織結果と一致する細胞であった。

【鑑別必要な細胞】正常頸管腺細胞と **Adenoma malignum** の鑑別点共に高円柱状の細胞で柵状配列を認めるが、正常頸管腺細胞の核は単層なのに対し、

Adenoma malignum は多層性、胞体には豊富な粘液をもち、黄色調の粘液の部分が鑑別ポイントとなる。核所見においては、正常頸管腺細胞はシート状配列を示し、核異型などはみられないが **Adenoma malignum** では極性の乱れや円から類円形の張のある核、クロマチン増量が認められる。高分化型頸部腺癌と **Adenoma malignum** の鑑別点 **Adenoma malignum** は、高分化型頸部腺癌に比べ粘液が豊富であることが多く、高分化型頸部腺癌にも粘液がみられることもあるが、**Adenoma malignum** のように多量に認められることは少ないように思われる。また、粘液の色調が **Adenoma malignum** においては黄色調を示す異型細胞がみられる。核所見においては、共に悪性なので大きな差は認められないが、**Adenoma malignum** では粘液が豊富な割に核が押しつぶされず、円から類円形の張のある核が認められる。

症例 2 子宮体内膜腺癌 (G1) の 1 例

杏林大学医学部附属病院 籾 ひろみ

【症例】28歳女性。平成13年2月ころより断続的に不正出血をみとめた。

【最終月経】平成13年4月26日。出血持続するため5月1日受診。

【検体】子宮腔部

【細胞所見】背景に好中球をみとめるなか、比較的小型核をもつ細胞集塊が散見した。細胞密度が高く、配列不整、核の大小不同などが認められたが、クロマチンの異常は認められなかった。また28歳とい

う年齢、性周期が増殖期であったことなどを合わせ良性域と考えた。

【組織診断】Endometrioid adenocarcinoma, Grade 1

【まとめ】組織診断の結果をうけ再検したところ疑わしい細胞を認めたが、全体的に染色が薄く微細構造が読み取れず、診断に不適とおもわれ再染色した。再染色後の標本は、核、細胞質ともに核所見が読み取れるようになり、組織診と同様の体内膜腺癌 (G1) と診断できた。偽陰性、偽陽性の原因の1つとして、染色性の良悪があげられるという事を今回改めて考えさせられた。この結果により、日常の染色がいか

症例 3 子宮頸部

杏林大学保健衛生学部細胞診断科 郡 秀一

【年齢】62歳

【性】女性

【採取部位・方法】子宮頸部・綿棒擦過

【臨床所見】52歳閉経、5妊2産

【コルポ所見】3。/White-like、5。/White

【臨床診断】HPV infection??

【組織診断】Mild dysplasia (very slight) & Human Papilloma Virus infection susp.

軽度異形成&ヒト乳頭腫ウイルス感染の疑い。

【細胞所見および診断】表-中層型扁平上皮細胞に核腫大、クロマチン増量、核形不整を認め、軽度異形成の存在を考えた。また、コイロサイト様の所見も認め、ヒト乳頭腫ウイルス感染の存在も否定できない。

【問題点】コイロサイト様の細胞は詳細な観察により、明らかなコイロサイトが標本中に極少数しか出現していなかった。細胞質の折れ曲がりなどにより、コイロサイト様に観察されるものが多かった。一方、組織標本上で、抗ヒト乳頭腫ウイルス抗体を用いた免疫組織化学染色を行ったところ、多数の陽性細胞を認めたため、ヒト乳頭腫ウイルス感染は明らかであった。このような症例の細胞診標本で自信を持ってヒト乳頭腫ウイルス感染を推定できるか、細胞核周囲のハロー (明庭) を炎症の影響などに見られるハローと明確に鑑別することが可能であるかが問題点であった。

【考察】本症例では明らかなコイロサイトが極少数

で、コイロサイトに類似した細胞が多数出現していたために、コイロサイトの所見（大きな核周囲の空洞化、空洞化内部は透明無構造、空洞辺縁の細胞質はヒアリン状に濃染、核に何らかの異常所見）を見逃す可能性があった。そこで明らかなコイロサイトの出現している症例を再検鏡した結果、コイロサイトの出現を示唆するいくつかの所見を見いだした。両染色細胞質、奇怪形細胞質および核内封入体様構造はコイロサイト出現例あるいは免疫組織化学染色にて陽性となる症例に出現し、これら細胞の存在はコイロサイトの存在を示唆する所見の一つであると考えられた。

症例 4 膣スミア中に *Candida albicans* の

真性菌糸が多くみられた 2 例

東邦大学医学部附属大橋病院 病理部

田口勝二、若山 恵、高橋 啓

【はじめに】細胞診標本で最も遭遇する機会の多い真菌である *C.albicans* は、酵母形と菌糸形の形態を示す二形性真菌である。我々はこれまで膣スミアや尿中のカンジダ属の形態について詳細な検討を行ってきた。この結果、膣スミアでは仮性菌糸に加えしばしば真性菌糸が観察されることが判った。

【症例】膣スミア中に真菌要素を認め、同時に *C.albicans* が分離同定された 61 例の中から *C.albicans* の真性菌糸が多く確認された 2 例を提示した。この中には、豆もやし様の初期真性菌糸である発芽管と、発芽管から伸長し連結部位にくびれない真性菌糸が多くみられた。

【考案】*C.albicans* の菌糸形形態は一様でなく、明確な定義がないまま、菌糸、仮性菌糸、真性菌糸などと様々に表現されている。しかし、これらを整理して考えると仮性菌糸は出芽により生じるものであり、真性菌糸は発芽管によって形成される。また、発芽管はカンジダ属の中で *C.albicans* とエイズ患者より頻繁に分離され、近年 *C.albicans* から独立した菌種として扱われるようになった *C.dubliniensis* のみにみられる形態であり、初期の真性菌糸に相当する。この形態は豆もやし様の特徴的な形態を示し仮性菌糸とは明確に区別できる。発芽管は伸長しながら有糸分裂を行い一定間隔で隔壁を形成して真性菌糸となる。仮性菌糸は、真性菌糸に似るが連結部

位にくびれがある点で区別される。

一般に *C.albicans* の形態的特徴として仮性菌糸が知られているが、膣スミア標本では真性菌糸性発育を示す症例も少なくないと推定された。

症例 5 類上皮肉腫

東邦大学佐倉病院 病理 北村 真

【症例】66 歳、女性。会陰部に発生した epithelioid sarcoma を摘出してからほぼ 1 年後に血痰が出現し、胸部 X 線にて両側肺野に coin lesions を認め、喀痰細胞診と TBAC が行われた。その細胞像を会陰部の epithelioid sarcoma の捺印細胞像と共に報告する。

【細胞所見】喀痰では、類円形または多稜形の広い胞体を有し、核偏在性を示す大型の腫瘍細胞を孤立性および上皮様の小集塊にて認めた。類円形または切れ込みなどの不整形を示す核を有しており、2 核細胞も少数認めた。核縁は薄く、クロマチンは細顆粒状ないし顆粒状で、1 または数個の明瞭な核小体を認めた。胞体は境界明瞭で、ライトグリーンに淡染性または好染性であった。TBAC においても、喀痰と同様の腫瘍細胞が孤立性および上皮様の集塊で多数見られた。腫瘍細胞は大小不同性で、切れ込みや皺などの核形不整が著明であった。大型の 2 核ないし 3 核細胞を散見し、紡錘形の腫瘍細胞も認めた。会陰部の epithelioid sarcoma の捺印細胞診では、喀痰と TBAC で見られたものと同様の腫瘍細胞が孤立性および上皮様の集塊にて多数見られ、これらの上皮様の腫瘍細胞と共に、紡錘形の腫瘍細胞も多数見られた。

【まとめ】喀痰と TBAC の細胞像からは組織型の推定が非常に困難であった。会陰部の epithelioid sarcoma の捺印細胞像は、過去に報告されてきた epithelioid sarcoma の細胞所見と一致しており、喀痰と TBAC にもこれと同様の腫瘍細胞が見られた。epithelioid sarcoma は再発頻度が高く、肺やリンパ節に転移し易い腫瘍であり、今回の症例の臨床経過からも、会陰部の epithelioid sarcoma の肺転移を考えた。

症例 6 Pap 染色におけるヘマトキシリンの検討

東邦大学大森病院 病理 井手 忠

【はじめに】パパニコロウが 1933 年、初期の仕事であ

ります。腫細胞診をもちいて、ホルモン変化を調べる染色法はヘマトキシリンで核をそめた後、エオジンとアニリン青の水溶液を別々に施すというものでした。所が、塗抹標本の宿命であります重積性や粘液、血液の混入等の材料を水溶液の染色液で染めると細胞判定上難しさがあつたと言うことです。その後、改良がなされ、その染色法の改良点として3つの目的をあげています。

このスライドに示しますように、それは

- 1.核構造の鮮明さ
- 2.細胞の透明感
- 3.各細胞の分別染色と言うものです。

このようなコンセプトを基にして、今日私たちが日常使用しているパパニコロウ染色液ができあがったわけです。核染色液を除いてアルコール性の液に4種の色素を用いた方法です。所がこの染色法も幾つかのマイナー・バージョンがあります。その歴史はヘマトキシリンが使われてから140年にもものぼります。その中で、パパニコロウは先ほどのスライドに示しました核構造の鮮明さからハリスのヘマトキシリンを用いていましたが、これが変わったのがGillのヘマトキシリンの登場でした。

1974年にACTA-CYTOLOGICAに発表されたもので、元々はBakerという人の考えに基づくのですが、酸化剤にヨウ素酸ナトリウムを用い、さらにヘマトキシリンの酸化剤を半分にして用い、ハーフ・オキシザイズドヘマトキシリンとして、染色液が長持ちするという特徴があります。その後、業者がGillのNo.1~3, 5と言った濃度を増した染色液が売られるようになり、染色液に水銀を使用せず環境に優しいと言うことでハリスに代わってGillの液が我が国の多くの施設で使用されてきていますが、その使用法は種類、希釈率などさまざまである。当施設の病院病理でも、Gillのヘマトキシリンを用いているわけですが、皆様もご存じの大村先生に婦人科細胞診のチェックをお願いしておりますが、先生の口癖は、いつも核染色が濃いと言うクレームです。一時期、先生とスクリーンとの間に陰険なムードができたこともありました。その結果、GillのNo.Vを1対4に希釈し60秒染色するという結果になりました。今回、大村先生が本研究会のお世話をするにあたり、技術的なことを扱いたいという先生の意向もあつたものですから、果たしてハリスやGill, マイヤー, カラッチといったヘマトキシリン液がパパニコロウが言う核構造の鮮明さとその違いと意義があるのだろうか、と言う素朴な疑問に対

して検討を行ってみました。

【材料と方法】

- 1.ヘマトキシリン液はHarris(1900), Gill(1974), Mayer(1901), Carazzi(1911)を用い成書に従って染色液の調製を行った。
- 2.細胞診材料としては湿潤固定に純エタノールと乾燥材料を用いた。また各ヘマトキシリン液の染色具合を肉眼的に見る目的でパラフィ包埋肝組織を用いた。
- 3.染色時間は細胞診・組織ともヘマトキシリンで1分と、塩酸アルコールで15回の分別を行ったものと、分別しなかったものでパパニコロウ染色のOGを2分, EAを3分間染色を行いその結果を検討した。

【結果】

- 1.ヘマトキシリン液の違いによる染色性の差について、これは肝臓のパラフィン切片ですがそれぞれのヘマトキシリンで核だけを1分間染めたものです。確かに、ヘマトキシリンはマイヤーよりも2倍のギルや5倍のハリスが濃く染まっています。しかし塩酸アルコールで分別をするとほとんど変わらなくなります。

同じ操作を塗抹した細胞で行なってみるとギルやハリスがやや濃く染まっていますが、マイヤーの核も均一に染まっています。しかし、マイヤーと他のヘマトキシリンとの濃さの違いは、OG, EAを掛け合わせると、明らかなヘマトキシリンによる差がないことがわかります。むしろマイヤーのヘマトキシリンでも十分に使用出来ると思います。

- 2.実際に、マイヤーのヘマトキシリン原法で染めて見ますと、これは、肺癌の捺印ですが1分間核染色をし、OG, EAを染色したのですが、何となく細胞全体に透明感がありません。マイヤーは進行性染色といわれ分別が必要ないと言われていたのですが、しかし塩酸アルコールで分別をしますと細胞質や核に透明感が出てきて核小体も明瞭になってきます。しかし濃度の高いヘマトキシリンで同じ操作をしてもこのようにはなりません。これは、腹水ですがマイヤーのように透明感が出てくるまでには、分別に倍の時間がかかります。

次に塗抹乾燥させた材料に各ヘマトキシリンとOG, EAを染色してみました。その結果、スライドのようにハリスのみが良い染色性をしています。このことから濃度の高いヘマトキシリンを使う理由として、塗抹された細胞が重積性を持ったとき、核が均一に染色されなければならないからとされていますが、それよりもむしろ染まり

にくい状況下に対して満足し得る理由があったのではないかと推測されます。

【まとめ】

1.ヘマトキシリンの染まりは、各個人の好みによりますから、これは良い、悪いの判断は困難です。2.濃度が高いと共染をおこしや誤診の原因にもなりやすく分別を多くやらなければならない。

3.なるべくヘマトキシリンの量を少なくし、長めの時間で染色して塩酸アルコールで分別したほうがパパニコロウの言う、核構造の鮮明さ、細胞の透明感、がでてくる。4.合理的な考え方をすれば、細胞診と組織染色を違えて用いる意義は無くその場合、濃度が問題となるだろう。

実際、大学病理ではマイヤーの変法で1.5倍の濃度のヘマトキシリンを使用しています。我々には、よく思い込みというものがあります。パパニコロウ染色にはハリスやギルのヘマトキシリンというようにこの染色にはこの液を使わなければならないという概念があって何ら疑問をいだかない事があります。今回、検討を通して合理的な考え方をすれば、細胞診と組織染色を違えて用いる意義はほとんど無いという確信しました。

【編集後記】

国家公務員共済組合連合会

立川病院 病理科

薄田 正

今年は、桜の開花が昨年比べて遅れており、3月25日現在つぼみの状態です。

また、イラクにおいては米英軍との戦争が日増しに激しくなっています。戦争はゲームではありません。「血が流れ、人が死ぬ」一日も早く戦争が終わり、平和になって欲しい。そう祈らずにられません。

さて、会報も8号を皆様に配布する事になります。今回は第16回杏林大学医学部三鷹校舎と第17回東邦大学大森病院の講演と症例内容です。両研究会共に内容も充実し、出席者も多く盛況でした。特に大森病院臨床講堂での研究テーマは主催者大村先生の意向に基づき、(固定と染色の化学)の基本でした。大村先生の酸化、還元にふさわしい内容だったように思います。『初心忘るべからず。』その大村先生も今年3月で大森病院を退職されます。しかし、これからも多摩細胞診研究会の発展、そして我々同胞の為に、ご指導して戴くことになっています。これからも大村先生よろしくお祈いします。

今回の会報からは講演や症例内容をフロッピーディスクにて送ってもらいました。したがって会報作成が大変短縮することができました。発表者の皆様方のご協力有難うございました。これから先、この形式でいきますので宜しくお願いします。